



ショートコメント

★★★★

Data 2021-146

愛のまなざしを

2020年/日本映画

配給：イオンエンターテイメント、朝日新聞社、和エンタテインメント/108分

2021（令和3）年11月15日鑑賞

シネ・リーブル梅田

監督：万田邦敏
脚本：万田珠美・万田邦敏
出演：仲村トオル／杉野希妃
／斎藤工／中村ゆり
／藤原大祐／万田祐
介／松林うらら／ベ
ンガル／森口瑠子／
片桐はいり

👁️👁️ みどころ

私はずっと注目している女優、監督、プロデューサーの杉野希妃が「鬼才」万田邦敏と組んだ話題作なら、こりゃ必見！『キネマ旬報』11月下旬号でも、約10ページの特集を組んでいる。

主人公は、仲村トオル演ずる、死亡した妻への“愛のまなざし”を断ち切れない精神科医。その診察室に現れ、彼に“愛のまなざし”を向けるのは、杉野演ずるファム・ファタール（？）だが、万田珠美脚本の功罪は？

どうして男は2人ともこんなに馬鹿なの？なぜ、こんな女にコロリと騙されるの？そんな展開にイライラなら、最後の“包丁沙汰”、“刃傷沙汰”も如何なもの？私はそう思ってしまったが・・・。

—— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * ——

◆私はずっと注目している、女優としてのみならず、監督そしてプロデューサーとしても大活躍している杉野希妃の最新の監督作『雪女』（16年）はイマイチだった（『シネマ40』未掲載）が、『欲動』（14年）は素晴らしかった（『シネマ35』193頁）。他方、私は小池栄子が主演した『接吻』（08年）（『シネマ20』126頁）はよく知っていたが、それが本作と同じように、監督・万田邦敏、脚本・万田珠美のコンビによることは全く知らなかった。また、本作に主演した俳優・仲村トオルが、鬼才万田邦敏監督と今回三度目のタッグを組んでいることも知らなかった。

宣伝量は大了ことはないが、きっと杉野希妃がホレ込んで出演し、プロデュースしたのだから、今作の脚本も監督もすごいだろう。そう思っていると、『キネマ旬報』11月下旬号が、「鬼才・万田邦敏が放つ、ハードコア・ラブストーリー」と題して本作を118～127頁にわたって特集したからビックリ！ここまで問題提起されればこれ必見！

◆万田邦敏監督は奥さんの万田珠美との共同脚本による『UNloved』（01年）、『接吻』（08年）、そして本作の3本でとりわけ注目されている。そこで面白いのは、万田珠美が脚本

書きについて特別の訓練を受けていないこと。本作のパンフレットには、そんな万田珠美と『いとみち』（21年）『シネマ49』（231頁）の脚本を書いた横浜聡子監督との対談があり本作の脚本作りの秘話が語られている。また、本作のパンフレットには、“妻を亡くした男が主人公の物語”という共通項で、『ドライブ・マイ・カー』（21年）の濱口竜介監督と万田邦敏監督との対談があるので、これも興味深い。さらに、前述の『キネ旬』には、万田監督 VS 杉野希妃の対談があるので、これも興味深い。しかし、本作冒頭に登場する、精神科医・高橋（仲村トオル）の診察風景を見ていると・・・？

私は精神科医の仕事がどんなものか正直よくわからないが、本作で見るような診察と薬の投与で本当に精神科の病気が治るの？そんな疑問は、今ある男とともに貴志のもとに現れた女性水野綾子（杉野希妃）の治療風景を見ていると一層顕著になる。私の弁護士業務は、依頼者の秘密を聞き出すという面では精神科医と同じだが、若く魅力的だが、どこかケツタイな女性の依頼者（患者）を用心すべきは、弁護士でも精神科医でも同じではないの？

◆妻を亡くしたことで、もう二度と誰も愛することはできないと思いつめ、生と死の間を彷徨うように生きている精神科医。それが貴志のキャラだ。これはいかにも脚本家・万田珠美の好きそうな設定だが、そもそも私はこんなキャラの設定自体に違和感がある。そう思いながら観ていると、プロの精神科医のくせに、数回の治療で少しずつ親しみを増してきた綾子と、あんなセリフのやり取りの末に結婚を決意するとは！これに、今なお死んだ母親のことが忘れられない一人息子が反発したのは当然だ。さすがに死んだ妻の両親は真正面から貴志の再婚に反対はしなかったが、精神科医のくせに、貴志はそんな周囲の感情すら読み取れないの？

さらに、本作中盤には、死んだ妻の弟、内山茂（斎藤工）が登場する。彼は貴志との間で、さらに綾子との間でさまざまな会話を繰り返すが、このセリフのやり取りはいかにも脚本家・万田珠美の好きそうな展開になっている。なるほど、なるほど。これはすべてが女性の視点からのもの、私にはそう思えてくる。本作全編を通じて目立つのは、貴志と茂、2人の男の馬鹿さ加減。2人はなぜ、ここまで単純に綾子の言葉に振り回されるの？貴志は常に理性的でそのセリフはいつも完璧のようだが、その内実のなさ（薄っぺらさ）はひどいものだ。これでは・・・？

◆吉永小百合、浜田光夫コンビの『愛と死をみつめて』（64年）は、ミコとマコの純愛を描いたベストセラー小説を映画化したものだが、そこでは“愛と死”の意味が明確だった。それに対して、本作に見る“愛と死”は・・・？貴志の元妻の死は自殺？そしてまた、その自殺の態様は睡眠薬のがぶ飲み？そんな勝手な推測（？）が実は大きく間違っていたことが、ラスト近くの貴志の説明によって明らかにされるので、それにも注目！

他方、“ああ言えばこう言う”タイプが際立つ綾子は、嘘を重ねて生きてきただけに、今や嘘を嘘とも思っていないらしい。したがって、そんな女が、「死んでやる！」と叫んでも、信用しなければいいだけのことだが、ストーリー展開は如何に？

◆私は弁護士として刑事事件もたくさん処理してきた。その中には殺人事件もあったが、ナイフや包丁で人を刺し殺すのは大変だ。三船敏郎主演の『日本でいちばん長い日』（67年）の切腹シーンを見ても、人間は腹を切っただけでは容易に死ねないことがよくわかる。だからこそ、切腹には“介錯”という“お助け制度”があるわけだ。

そんな目で本作ラストに訪れるクライマックスを見ていると、その馬鹿馬鹿しさは・・・？

2021（令和3）年11月30日記